



もう考えている時間は無い。こうなったら一か八かだ。

「美月、10秒だけ最大加速かけろ！」

「最大？」

「いいから、やるんだ」

「いいわ、いくわよ！」

ガクンと衝撃があつて、背景のマップが一気に流れる。俺は、牽引ビームをカットした。へたに制御しようとせず、エンジンの重力場で引つ張った方がいい。自由落下なので衝撃が無いからだ。たとえばぐれても、相当な速度が得られるから、とりあえず、ここからは出られないだろう。

「5、4、3、2、エンジンカット。速度ポイント3C。ゾーン境界まで10秒」

「思ったほど衝撃がなかったな」

「どうやら、コンピュータが補正してくれたみたいだね」

「もう調整が終わったのか？」

「いや、コンピュータが学習したんだよ」

「学習？」

「うん、実は、コンピュータの余力を使って、SF2Aの自律制御系をシミュレーションするプログラムを入れてあつたんだ。それが効いたらしい。本物ほどの性能は出ないけど役にはたつたみたいだね」

ジョージの奴、そんな仕掛けがあるならもっと早く言えよ。でも、事故船はこれで見失ってしまった。どうにか、ぎりぎり逃げられたとは思うのだが、この速度ではもう追跡できない。

「事故船の予想針路は出るか？」

「いや、位置と速度は追跡できてるよ」

「追跡？どうやって」

「観測衛星に自動追尾させてる。マップに出すよ」

サラウンドマップに赤い点とその座標、速度が表示される。

「ケイ、合流コースを出せるか？」

「リアルタイムで計算してるよ。そっちにデータを回すね」

「美月、コースに乗ってくれ」

「了解。エンジンの反応もだいぶよくなったわね」

マップ上には合流コースが表示されている。美月がそのコースに船を乗せると合流予想時間が表示される。

「かなり時間がかかるな。相手は漂流状態でシステムも止まってるから、心配だが」

フランクが言う。

「エドワーズ君、救助隊の現在位置はどうだ。どっちが早い？」

「当初予定位置からかなりずれているので、こちらより早く追いつくのは難しいかもしれない。座標は送ります」

「よし、たのむ。こっちも急ごう」

マップ上に、救助隊の青いマークが表示される。向こうも動き出したようだ。だが、速度は惑星間航路では、まず出さないような高速である。救助艇も高速艇だが、この訓練艇とあまり大差がない。既に限界近い速度が出ているので、追いかけるのはかなり厳しいだろう。とにかく、先に着いた方が急いで対処しないとイケない。

「コースに乗ったわ。合流まで20分くらいよ」

「離れる前の状態から見て、クルーの様子が気になります。メディカルモニタが切れているので状態がわかりませんから」

「サム、通信可能範囲まではどれくらいかかる？」

「通常の通信方式による接続可能距離まで、推定17分プラスマイナス20秒」

「直前だな。ジョージ、何か手は？」

「そうだね、コマンドを送って非常用のテレメトリーを起動してみよう。双方向通信はムリでも、受信だけならできるだろうから。観測衛星からコマンドを送信させてみるから、受信できるか試して見てくれないか」

「了解、テレメトリー受信を待機」

「じゃ、コマンド送信するよ」

宇宙船や基地との間の通信は高度にデジタル化されている。音声、映像、様々なデータはすべて統合されてコンピュータ間で通信が行われる。しかし、今回のように相手が応答出来ない場合、まず接近して非常用回線からアクセスする必要がある。それから、相手のコンピュータを介して通常回線をオープンして接続を確立する。一方、こうした方式がとれない場合や、メインコンピュータがダウンしているような場合、外部から状況を知ることが出来るように、一方的に最小限の情報を周囲に送信するモードが用意されている。これが非常用テレメトリーだ。これだと、特定の非常用チャンネルを使って、セキユリティーコードを送ることで、どこからでも起動が可能だ。

「テレメトリー受信を確認。メデイカルに接続します」

サムが受信したデータをメデイカルコンソールへ接続する。これで、マリナが事故船のクルーの様子をモニタできるはずだ。

「クレア君、どうだ？」

フランクが聞く。

「状態は・・・かなり悪いです。一人に血圧の低下が見られます。心拍も弱いですから、かなり危険な状態と思われれます。他のクルーも状態は悪化してますね。血中の酸素濃度が下がっているのは、もしかしたら環境維持系が故障しているのかもしれない」

「ジョージ、そっちはチェック出来るか？」

「ちよつと待ってください・・・。うん、たしかに環境維持システムにエラーが出てる。でも、これじゃ詳細はわからないな。でも、最悪、船内の酸素供給が止まっているとすれば、一刻を争うぞ」

「酸素があっても、浄化システムが止まって二酸化炭素濃度が増加すれば危険です。テレメトリーからは、その傾向も出てますから」

クレアがいつになく真剣な顔で言う。メデイカルにしてみれば、こういう状況で指をくわえて見ているのは耐えられないだろう。

「今の情報は救難艇とも共有しておこう」

フランクが言う。

「テレメトリー情報は救難艇でも受信できています。彼らの見解も同じです。時間の勝負だと」

サムは救難艇との通信を維持し続けていたようである。とはいえ、どちらも速度はほぼ限界まで出ている。これ以上時間を短縮するのは困難だ。どうすればいい……

「エドワーズ君、もう一度インターステラに通信を繋いでくれないか」

フランクが言う。恒星間航路管制に何をたのもうと言うのだろうか。

「次にワープアウトしてくる船に救助を要請するんだ。恒星間宇宙船なら、あつという間に事故船を捕捉できるだろうし、医療設備も整っているからな」

なるほど、そうか。我々は今しがたワープアウトゾーンを出たばかり。それには絶好の場所にいるわけだ。

「了解、インターステラ管制に救援依頼を要請します」

「たのむ。あとは、いいタイミングで船が来てくれることを祈るだけだが……」

重苦しい時間が流れる。

「管制から連絡。間もなくワープアウトしてくる貨物船が救援要請を受けてくれたそうです。ワープアウト後、直接、こちらのチャンネルに連絡を入れるとのことですよ」

「よし、わかった。通信チャンネルの音声を共有してくれ」

昔なら、スピーカーに出して……というところかもしれないが、クルー全体が情報共有モードにある状態では、インターフェイスを経由して音声を共有した方が早い。実際、聞いている方には、外から聞こえているように感じるのだが、音声は非常にクリアで、耳から入ってくる物音とは完全に分離されるから聞き落としがほとんどないわけだ。そして、その直後だった。

「おい、アカデミーのひよっこども、聞いているか。こちらは救援隊だ。座標を送ってくれ」

「これは……どこかで聞いた声だが……」

「え、この声って？」

美月も気づいたらしい。すかさずフランクが応答する。

「こちら、訓練艇T205、救援感謝する。事故船の座標を転送する、至急対応を願う」
「座標、送信します」

サムが座標を送信するとすぐさま応答があった。

「よし、受信した。こっちはまかせろ。クルーの状況はどうだ？」

「あまりよくない。意識がない上に環境維持系が故障しているようだ。非常用テレメトリーを受信できるか？」

「了解だ。今うちのドクターが見ている。心配するな、ものの1、2分で回収できる」

「よろしくたのむ。ところで、どこかで聞いたような声だが、貴船は？」

フランクもか……もしかしてこいつは……

「なんだ、今こっちもそう思っていた所だ。こちらは、貨物船ヘラクレス3、俺はナビゲーターのデイビッド・ムラカミだ、そっちは？」

や、やっぱり……。俺と美月は思わず顔を見合わせた。

「なんだ、デイブ、デイブなのか。俺だ、フランクだよ」

「フランク？ フランク・リービスなのか。どうりで聞いたことがある声だと思ったが、こりや奇遇というか、お前もあいかわらずトラブル続きみたいだな」

「ああ、お互い様だがな。こっちはいいから、早く救援をたのむ」

「大丈夫だ、既に牽引ビームで捕捉した。現在収容作業中だ。あとどれくらいでここまで来れる？」

「流石にボロ船と言えども、恒星間貨物船だな。こっちは15分くらいかかりそうだ」

「おい、こっちは船長も聞いてるんだ。余計なことは言うな馬鹿野郎。ボロでも、亀よりはマシだぜ。おっと、今のは失言だ。これは立派な由緒ある船だからな」

なんとという偶然だろう。忘れもしない名前である。1年ちよつと前、入学式前日に俺と美月が、静止軌道ステーション行きの特S5型シャトルで遭難した時、救助に来てくれた船、それがヘラクレス3だ。デイブことデイビッド・ムラカミはその船のナビゲーターで副長。フランクや美月の両親とはアカデミーの同期なのである。もはや、これは偶然というより、因縁に近いかもしれない。

「一年ぶりですね、先生」

「そうだな。しかし、中井と星野は、よほどあの船に好かれているようだな」

フランクが苦笑しながら言う。

「もしかして、シャトル事故がらみの話なのかな？」

ケイはまた興味津々。

「そうだよ。あの船が俺たちを助けてくれたんだから」

「へえ、そうなんだ。こりや因縁だねえ」

「ちよつと、嫌な言い方しないでよね！」

と美月が食ってかかるが、ケイはおかまいなしだ。

「フランク先生も今の人は知り合いませんかあ？」

「そうだ。アカデミーの同期だよ。ちなみに・・・、言ってしまったてもいいかな、星野の両親も同じだが」

「うわあ、ますます因縁っぽい。親の代からかあ」

ケイは完全に面白がっている。一方美月とは言えば、今にも嘔みつきそうな怖い顔をしているのだが・・・一難去って喧嘩はご免だ。

「でもまあ、お世話になった船だしな。こうしてまた会えたのも何かの縁には違いないよ」

と、軽くフォローしておくことにする。でも、確かにそうだ。宇宙も狭いというのは、実感するところなのだ。美月の両親、フランク先生にデイブ、そして俺たち。何か、どこかで繋がっているような気がするのも不思議じゃない。

「ほら、雑談はそこまでだ。まだ、とんでもない速度ですっ飛んでることを忘れるな！」

フランクが注意して、その場の話はおしまいとなる。やがて、長距離センサーのレンジにヘラクレス3が入ってきた。既に事故船は収容されて、乗員の手当が行われているようである。そして、俺たちの視界にも、あの巨大な船が見えてきた。

「ヘラクレス3、こちらT205、着艦許可を！」

フランクが呼びかける。

「歓迎するぜ。システムをニュートラルにして、こつちに制御を渡してくれ。収容する」

「了解した。久々に会えるな」

「ああ。1年ぶりだな」

「よし、着艦体勢をとろう」

フランクがこちらを向いて言う。

「システムをニュートラルに。ヘラクレス3に制御を渡します」

「システム接続、リンク完了」

パネルの表示がブルーに変わり、船はゆっくりとヘラクレス3に吸い寄せられていく。

「うわあ、おつきいねえ、この船」

ケイが貨物船を見上げて言う。ヘラクレス3は既に頭上の視界のほとんどを覆っている。

「インターステラ級の大型貨物船だね。型式は古いけど、パワーはかなりありそうだな」

ジョージもこの船に興味を引かれているようだ。

「この船だったら設備も整ってるでしょうから、負傷者も一安心ですね」

乗員を気にかけているのがメデイカルのマリナらしい。

「外見は古いけど、システムは最新に近い。この船のコンピュータとの通信もスムーズに行っている。この船と一緒に外見と中身は別物」

サムはもう相手側のシステムに探りを入れていようだ。この娘もなかなか油断がならない。

「どうだ、見かけは古いが、そこそこのものだろう？」

いきなりデイブが話しかけてくる。どうやら、サムがあちこち探っているのには気がついていたようだ。

「バ、バレてる？・・・」

サムがつぶやく。

「あははは、まあ、エイブラムスほどじゃないが、デイブの奴もそっちのほうは結構やり手だったからな。あの船のシステムもだいぶ奴の手が入ってるんじゃないか？」

フランクが笑いながら言う。

「しかし、そっちもなかなか面白そうなものを積んでるじゃないか。試作品か？そのコンピュータは」

デイブにはこちらの中身もお見通しらしい。カウンターを入られた感じだ。

「そうだよ。もともとは、SF2A用のものだ。うちの生徒で、お前さんの上手を行きそうなのが一人いてな。そいつが徹夜でソフトウェアを移植したのさ」

とフランク。ジョージはちよつと照れくさそうにしている。

「なるほど。アカデミーはまだ健在ってわけだな。例の二人といい、なかなか面白そうな奴らがいるじゃないか」

「そうそう。その二人だがな、実は今ここにいるんだ・・・」

フランクは俺たちの方を見ながらそう言う。

「なんだって？ またお前らなのか。よくよくトラブルが好きな奴らだな」

いや、別に好いている訳じゃないんですが・・・

「あ、お久しぶりです。中井です。その節はお世話になりました」

フランクに促されて俺が応答する。

「いやいや、お世話しましたっけ？ 今回もだがな。そういえば、あのお嬢ちゃんとは仲良くやってるのか？」

えっと・・・、そりやどういう意味ですか？ 誤解を受けるような発言はやめてほしいんですが・・・

「なるほどなるほど、入学前から公知の仲でしたか。いやいや妬けますなあ」

ほら、すぐに食いつく奴がいるし、で、たぶん・・・

「あんたね、それどういう意味よ。あたしは、ケンジなんか、なんとも思っていないんだからね」

・・・という反応になるわけで・・・最終的には俺にオハチが回ってくることになっている。

「相変わらず、そんな感じで痴話喧嘩してるみたいだな。全部こっちに筒抜けだが・・・」

デイブが笑いながら言う。だから・・・

「ち、痴話喧嘩なんかじゃないわよ。そっちがおかしな事を言うからじゃない！ け、ケンジは私の下僕なんだから、私と仲良くするのは当然なんだから」

おいおい、言うに困って何を言い出すんだ、美月！

「そうか、まだ続いてるんだな。やっぱりこりや一生物だな。がんばれよ、中井ケンジ」

たのむから、それだけは止めて欲しい……。一生こいつの下僕なんて、俺の人生は終わってしまおう。

「ねえ、ケンジ。一生、美月の下僕はいいとしてさ、ついでに私のもやってくれないかなあ」

よくない！ たのむから、そこを既成事実化しないでくれ。しかも下僕の掛け持ちなんざご免だつての！

「ほらほら、そこまでだ！ そろそろ着艦だぞ。準備にかかれ！」

と、フランクの一言で、とりあえず大騒ぎは回避されたのだが、こういう火種はこのチームにつきまといているわけで……。とはいえ、フルオートに着艦シーケンスだから、異常が無いか見ている以外、何もすることは無い。

「ヘラクレス3とのデータリンク、異常なし」

「着艦シーケンス、第2フェーズに移行。自動制御異常なし。間もなく格納庫ゲートを通過します」

シャトルの時は、向こうの牽引ビームのお世話になったのだが、今回は自力での着艦である。まあ、何もしなくていいことには変わりはないのだけど。そうやって、俺たちの宇宙艇はヘラクレス3の格納庫に着艦した。